

穿たれた一つの真空について
 ——マーク・トウェイン『まぬけなウィルソン』に
 見られる近代的アイデンティティの成立過程——

桑 野 弘 隆

序

マーク・トウェイン (Mark Twain) は、19 世紀中葉の合衆国南部において、社会そして個人が大きな変容を被る瞬間を目の当たりにし、それを『まぬけなウィルソン』(Pudd'nhead Wilson) に表現しようとした。『まぬけなウィルソン』は南北戦争以前を扱った小説であるが、その舞台であるドーソンズランディング (Dawson's Landing) では商品経済の浸透につれて奴隷制に下支えされた家父長制が崩壊の兆しを見せており、家父長としての個人の生も揺らいでいた。養子にした甥に殺されるドリスコル判事 (Judge Driscoll) の生はこの事態を象徴している。旧秩序の解体は進んでゆく。ところが、誰も次に来るものを見通せていたわけではない。寄る辺もなく、目標も見いだせないというのが転換期に特有の経験であろう。その転換期につきものの不安と混乱は、秩序壊乱的になるまい、不可解で首尾一貫性を欠く性格をもつトム・ドリスコル (Tom Driscoll) の造形に反映されている。

だが、やがて新たな秩序が形成され始める。そこでデイビッド・ウィルソン (David Wilson) が演じる役割はとりわけ重要である。ウィルソンは指紋収集という彼の「趣味」の特殊な使用法を見いだしたのだった。すなわち、ドリスコ

ル判事殺害の真犯人を突きとめるため、ウィルソンは指紋鑑定を法廷に持ち込んだ。指紋が人によって異なるということなど考えたこともなかった人々を前にしてである。ウィルソンは、ドリスコル判事殺害の真犯人がトムであることを明らかにし真理と秩序を回復したのだったが、そのふるまいの意味はそれだけに留まらない。いわば、ウィルソンはデータベースというテクノロジーを導入し、そこに個人を特定するという実践を接合したといえる。そのふるまいの真の意味は、法にも適う客観的なデータに基づいて他人と区別される個人のアイデンティティを確立したところにある。ウィルソンが端緒を切ったのは、諸制度を媒介にしテクノロジーによって確証される近代的なアイデンティティとそれに対する欲望である。言いかえるならば、ウィルソンはドーソンズランディングの人々に「本当の自分」への欲望を吹き込んだのだ。

この欲望への代価として、ドーソンズランディングの人々は「まぬけ」(Pudd'nhead)と呼ばれるのは、今度は自分たちであることを悟る。もはや伝統や家柄そして奴隷制における身分に恃む者達の支配は終わりつつあったが、代わってウィルソンに代表されるような情報と技術を掌握することによって、諸個人を管理する者への権力の集中が正当性を帯びる時代がやってきたのである。かつて人々を縛っていた家父長、主人、奴隷などのカテゴリーからの解放は進んだが、同時に、個人情報によって諸個人を特定し直接に管理するシステムが合衆国の南部社会をも覆い始めていたのである。

1 没落する生の様式——ドリスコル判事の場合

ウィルソンがやって来た 1830 年のドーソンズランディングとはいかなる場所であったか。ウィルソンが「まぬけ」(Pudd'nhead) という不名誉な称号をもらうことになったエピソードは象徴的である。不快な犬の鳴き声を耳にしたウィルソンは、その犬の半分の所有権をもったらその半分の犬を殺してやりたい、と法律の専門家らしい気の利いた皮肉を発してみせたはずだった。しかし、人々はそれを文字通りに受け取ってしまう。半分だけ殺された犬、そんなものがいるはずがない、そんなものを奴は信じているのか、ということになる。ウィルソンは「まぬけ」にされた。

ただし、ドーソンズランディングの人々がヒューモアやシニシズムをも解さない即物的な実家というわけではない。『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(A Connecticut Yankee in King Arthur's Court) のハンク・モーガン

(Hank Morgan) は、血も涙もない合理主義の申し子であった。しかし、ドーソンズランディングの人々はリーズナブルなものからおよそ遠いものに寄りかかって生きている。トウェインは、ドーソンズランディングとは家父長と「家」をしかるべき順番でもって読み上げることで表現されるべき場所であると言う。「この町の第一人者はヨーク・レスター・ドリスコル (York Leicester Driscoll) である」(4)。そのうえドリスコル判事は「この町の最有力者である」とも形容される。次にハワード家 (the Howards) の家長、つぎにエセックス家 (the Essexes) の家長が続く。彼らの家はファースト・ファミリーズ・オブ・ヴァージニア (First Families of Virginia) に属する名門であり、その名は単なる記号ではなく、歴史、伝統、名誉などが過重なまでに負荷されていた。

In Missouri a recognized superiority attached to any person who hailed from Old Virginia; and this superiority was exalted to supremacy when a person of such nativity could also prove descent from the First Families of that great commonwealth. The Howards and Driscolls were of this aristocracy. In their eyes it was nobility. It had its unwritten laws, and they were as clearly defined and as strict as any that could be found among the printed statutes of the land. The F.F.V. was born a gentleman; his highest duty in life was to watch over that great inheritance and keep it unsmirched. He must keep his honor spotless. (...) These laws required certain things of him which his religion might forbid: then his religion must yield--the laws could not be relaxed to accommodate religions or anything else. Honor stood first. (58)

宗教をも従える家の名誉、そのためには家長達は命をも賭す必要がある。

「犬の半分の所有権」は意味不明でも、家柄、名誉、伝統などを人々は痛いほど理解している。理解という言葉では甘いかも知れない。それらは言葉や観念というよりは、全き物質性をもったものとして生きられているからだ。つまり、それらはドーソンズランディングの秩序を最終審において支えている。ドリスコル判事にとって家柄や名誉は、彼の行為の大義であり原因であるばかりではなく、彼の生に意味を与えるものなのだ。

翻って、この過剰なまでの負荷を与えられた家名の数々に対し、この辺鄙な

町にたどり着いた男のウィルソンという名前はどうか。ウィルソンの経歴はドリスコル判事、ハワード氏、エセックス大佐等と並べられて紹介される。しかし、彼の経歴は、家柄や伝統などこの地での評価の対象となる点においては無であり、そしてあまりに「機能的」に過ぎる。この男の「有用性」はわかりすぎるぐらいではあるが。男はスコットランド系で、二十五歳の大学出であり、二三年前に東部の大学の法学部で大学院も修了している。当時のロースクール出身者ならばさぞかし尊敬的であつたろうと思われる。しかし、これも土地の人々には何の像も浮かばなかったようだ。なるほど、特権階級の家父長達はコミュニティにおいて責任ある職につき、重要な役割を果たしてはいる。だが、それが直接彼らの間にある「順列」に反映されるわけではない。ここでは、社会的な役割や機能は家柄や血統などに従属している。

この町でウィルソンが自己保存のためにとった道は、彼自身が帯びてしまった属性に慎ましく特化することだった。つまり便宜と有用性の提供者へと。測量や会計などの実務を請け負い、彼は口を糊することになる。だが二十年後、ウィルソンは町の表舞台に華々しく再登場する。おそらく、ウィルソンは何も変わっていない。変わったのは彼以外である。ドリスコル判事の死は、この変化を象徴的に語っている。

2 転換期の嵐——トムの場合

確かに変化の兆しはあった。家の名誉のためなら決闘をも辞さないドリスコル判事のような生がある一方、ミシシッピ川はこの辺鄙な町にも大きな変化をもたらそうとしていた。ドーソンズランディングの船着き場にはミシシッピを行き来する蒸気船が停泊し、何とも魅力的な商品が次々荷揚げされている、とトウェインは語る (20)。何かドーソンズランディングにとって異質なものがミシシッピの交通を通じてもたらされようとしている。それはドリスコル判事を破滅へと追い込むものである。殺されたことが彼の破滅ではない。それが決闘による名誉の死ではないこと、もはやそのような死に様が不可能であることが彼の悲喜劇である。

そのミシシッピはセントルイスからある人物を運んでくる。彼は余所者ではない。むしろなじみの者である。トム・ドリスコル、ドリスコル判事の甥であり、今ではその法定相続人となっている。しかし、彼はドリスコル判事やその友人達とおなじ種類の人間ではない。彼は F.F.V の名門であるドリスコル家の

跡継ぎにはふさわしくない放蕩息子であり、臆病者である。ゆえ、トムは勘当の憂き目にもあう。

トムという人物は『まぬけなウィルソン』という小説が孕む諸問題と照らし合わせて論じられてきた。発表当初から『まぬけなウィルソン』は、その形式的な欠陥が指摘されていた。元は一つの小説として構想していたものから「かの異形の双生児」(“Those Extraordinary Twins”)を「帝王切開」したと、トウエインは証言している(119)。結果、「まぬけなウィルソン」が現在の形になったと言うのである。だが、その「切断面」がそのままになっている、という指摘は数多い。様々なエピソードがどうも繋がらない、人物の性格がちくはぐである、というわけだ。その諸矛盾がトムという登場人物に集約されているきらいがある。例えば、10章でトムは自らの「黒人の血」について少しばかり悩んでは見たものの、奴隷制の諸矛盾を認識するに到るというのでは毛頭なく、次章ではすっかり忘れたかのようにふるまっている、という具合である。

このような矛盾と問題点から、研究者、批評家達は二つの結論を導き出してきた。一方は、この小説は到底キャンノン足りえないという立場である。形式においても人物描写においても矛盾と齟齬だらけであり、主人公・トムからはいかなる道徳性をも引き出すことができない。そこには作者の人種差別的偏見さえ見いだせよう。こうして小説は二重の欠如の抱えていると主張される。すなわち、形式的(構造的)首尾一貫性の欠如であり、トムの怯懦、すなわち誠実さと勇氣という人間性の欠如である。他方は新歴史主義的な視点であり、小説の形式の破綻やロクサーナ(Roxana)やトムなどの混血の登場人物が抱えている矛盾を通して、当時の人種と階級の敵対関係をかいま見ることができるという立場である。例えばフォレスト・ロビンソン(Forest G. Robinson)によれば、小説の欠陥とみえる部分こそは、人種的諸問題に向き合おうとする傾向と、それらを心地よいイメージやコミカルな物語でもって隠蔽しようという傾向とが、作者のなかでせめぎ合う最もクリティカルな地点なのだということになる。レイシズムと奴隷制の問題に入ると、作者は問題に正面切って向き合うことを忌避しようとし、物語の破綻という代償を払ったのだ、とロビンソンは考える。トムという人物の首尾一貫性のなさ、彼に人種的含意が担わされているからであり、当時の人種を巡る社会的矛盾と敵対とを反映している、というわけだ。作者の無意識は、社会の無意識と繋がっている。さらに自らの出自の問題に向き合い、それをもたらした社会を問おうとする意志や能力をトムが持たないということ、それこそがイデオロギーの浸透効果を如実に示すものであり、

トウエインが到達した洞察なのだとロビンソンは結論づける (Robinson 22-45)。また、キャロリン・ポーター (Carolyn Porter) ならば、ロクサーナのプロットに、「母系制」を力の源とする秩序を転覆するような傾向と父権的奴隷制の諸価値に追従する傾向という相反する対立が見られることをふまえたうえで、後者の傾向はトウエインがロクサーナにおそれをなして籠を嵌めたことを意味する、と主張するだろう (Porter 136)。

つまり新歴史主義に近い論者からすると、小説が孕む諸矛盾、亀裂は一つの症候をなすことになる。この症候は、レイシズムと奴隷制を再生産していた当時の諸言説——被抑圧者であるロクサーナにさえ取り憑いている——にその原因を見いださなくてはならない。このような症候を「無意識に」記録してしまった小説はやはり文学研究の対象となりうる、というわけだ。

だがその場合、小説に対する距離と姿勢それ自体も難しいものとならざるをえない。ある一人の白人男性作家がイデオロギーにどっぷりと浸かっていた格好の例をトウエインは提出しているだけなのか。テクストクリティークの進展をふまえ、デイビッド・スミス (David L. Smith) は、そのような単純な還元に警鐘を鳴らしている。創作の順序に従うならば、トウエインがロクサーナを創造しトムに「アフリカの起源」を負わせることになる前から、彼は臆病で卑怯なキャラクターとして設定されていた、とスミスは指摘する (Smith 5-6)。つまり、「黒人」として設定される前からトムの性質は変わっていないのだ。

従来の批評、研究に共通しているのは、トムを否定的なもの、道徳性・人間性を欠いたものと見なし、その原因を追及してきたというところである。だが、それならば彼のふるまいが引き起こす秩序の壊乱を如何に考えたらよいのだろうか。

なるほど、ドリスコル判事やロクサーナから見れば、トムは大事なものを欠落させている。それは家柄、名誉、伝統などを、命を投げ打ってでも守ろうという姿勢と勇気である。ドリスコル判事にとって生とはそれらの価値を守り、伝えるために存在する。ところが、ドリスコル判事の信奉が増せば増すほど家柄や名誉はますます堅固な物質性を帯びる一方、個人はその永遠性を支える担い手になりさがる。意識においては、ドリスコル判事は「主体的に」、「自発的に」ふるまっているのかも知れないが、事態は彼の意志の恣になるようなものではない。いささか籠の外れた形でドリスコル判事をコピーしてみせるロクサーナをもちいて、トウエインはドリスコル判事の「勇気」をパロディ化している。

では、トムにはドリスコル判事に見られる行動原則のようなものは存在するのだろうか。教訓はすぐさま忘れ去り、享楽にふけてしまう男、ロクサーナに罵倒され、ドリスコル判事には勘当の憂き目にあう男。トムのふるまいは、せいぜいが場当たりの的と言うのがふさわしいかも知れない。しかしながら、トムはその場しのぎのためなら何でもするし、労苦や小細工も惜しまない行動力をも併せ持っている。借金返却のためなら黒人の娘に変装して泥棒も繰り返すし、セントルイスで商売もする。また、でまかせをでっち上げて母親を「川下」に売り払いすらする。リチャード・チェイス (Richard Chase) が指摘するように、この小説においては「川下」はほとんど死と等価物であるのにもかかわらず (Chase 244)。さらにトムは小説中で最も移動を繰り返す人物でもある。変装や演技によって、そして「取り替え子」(changeling) のプロットによって曖昧にされた出自によって、トムは黒人と白人の境界 (color line) だけでなくジェンダーの区別をも越境していくのであった。それに、ジェームズ・コックス (James Cox) が指摘するように、トムが「カラー・ラインを越えることによって奴隷制の中核にある罪を暴き出し、復讐を担う者」(Cox *Fate* 232) であることも否定することはできないだろう。怠惰や怯懦と同居しているトムの奇妙な行動力をいかに説明するべきなのか。

コックスが『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』の研究で追求した「自己保存」(self-preservation) が有効な鍵概念となりうるかも知れない (Cox *Connecticut* 390-401)。『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』のハンク・モーガンの合理主義を駆っていたのは自己保存という原理であった。ところが、コックスが言うところの「自己保存の機械」(machinery of self-preservation) は、自分の恣にすることのできないもの全てを殲滅するに到る。自己保存は、他人 (自分ではない者) への暴力によって裏打ちされている。すなわち、ハンクはあらゆる合理性と近代技術を用いて敵を抹殺しようと企てたのだった。結果、他人に向けられた暴力は、ハンクの自己保存をも脅かすことになる。

トムもまた、神や「家」という超越的根拠が否定された後、人間達に憑いて離れない自己保存への欲動によって駆り立てられているように見える。保身のため母親のロクサーナをも裏切るのだから。ゆえに、すぐさまドリスコル判事やロクサーナが具現化している家父長制的なものから近代的エゴイズムへの移行をトムに見いだしたくもなる。だが、トムにおいては神や「家」の位置に自己 (self) が居座ったのだ、とは言えないようである。確かに、自己保存とし

か認めえないふるまいをトムに見出すことができる。ところが、トムには、保存されるべき首尾一貫した自己をも欠いている。トムは、手取り早く、目先の利益だけに飛びつく。後で大きな代償を払うことが予想できたとしてもだ。だが、そのエコノミーを追求するあまり、保存すべき自己すらも払いのけてしまう、という具合である。黒人としての出自を悩み苦しんだはずのトムがすぐさま忘れてしまうのは、彼が記憶し、持続するべき自己を持ち合わせていないからである。

ロクサーナの告白によってトムには黒人という「本質」が与えられたようにも思われるが、「本質」なるものはトムには虚ろに響く。それは、出会う人物ごとに違ったペルソナと声色をトムが使い分けるとのことや、その「変装好き」からも読みとれよう。手相からルイージ (Luigi) の過去の秘密を読んでもせたウィルソンが、トムの手をも取ろうとする場面がある (53)。トムは激しい拒絶と狼狽を見せる。それは彼の「出自」が見破られることへの恐怖から来たものであろうが、同時に、単一のアイデンティティを授けられることにたいする峻拒をも表す。また、彼の義父殺しほどオイディプスの復讐心から遠いものもない。オイディプス・コンプレックスに取り込まれているならば、義父殺しによってトムは自己を確立したであろうから。

自己保存から自己が差し引かれることによって、トムという存在は不気味な否定性と暴力を帯びる。その否定の力は、ロクサーナやドリスコル判事が後生大事に守り抜いてきた家柄、名誉、伝統などあつという間に無に帰せてしまう。ルサンチマンなく、その場しのぎのためだけ、トムはロクサーナやドリスコル判事を破滅させるのだ。自己保存すら叶わない空虚で無方向な否定の嵐が、旧来の諸価値、秩序を解体してゆくのを我々は目の当たりにする。

ドーソンズランディングは転換期を迎えつつあった。転換期においては、それまでの秩序そして事物の意味を支えていた根拠までもが疑わしいものとして否定され、転覆されうる。この転換期に猛威をふるう否定と壊乱の諸力、そして不安と混乱の経験がトムという人物に刻印されているともいえよう。しかしながら、ウィルソン——この魔術とも科学ともつかない術の使い手——がトムの前に立ちふさがる。ウィルソンは、トムが象徴しているもの、その御しがたい壊乱的なものに手綱をつけ、新たな秩序を打ち立てるのである。

3 新たな秩序を打ち立てる者——ウィルソンの場合

ウィルソンは小説の最後、指紋鑑定法という「最新の」技術を導入して、ドリスコル判事殺害の真犯人を明らかにする者として現れる。ゆえに、ウィルソンを近代技術と近代合理性の申し子として解釈することも可能かもしれない。だが、ウィルソンが近代的諸価値を体現している側面があるとしても、事態はより複雑である。たとえば、ウィルソンが手相から運命を読むことができるという「特技」をもっていることに留意する必要がある。彼は手相学の使い手でもあるのだ。彼は先取りつつも遅れている。

さらにウィルソンの成功を決めた指紋鑑定法はアナクロニズムである、ということも考慮に入れなくてはならないだろう。そもそも指紋を犯罪捜査に利用するというのは、日本に宣教師として来日したヘンリー・フォールズ (Henry Fauld) が 1880 年に発表した論文に端を発するのであり、指紋による個人の特定が警察機構や法廷に浸透してゆくのは遡っても 20 世紀初頭のことである。つまり、ウィルソンが法廷で名を上げる 1853 年というのはあまりにも先取りしすぎている。トウェインもまた 1892 年に発表されたフランシス・ガルトン (Francis Galton) による『指紋』(Finger Print) から小説のヒントをつかんだのだった。

つまり、ウィルソンは当時の公認されたテクノロジーを、しかるべき資格と権威でもって使用したのではない。ロクサーナがウィルソンを魔術師 (a witch) と恐れたのはあながち間違っていない。指紋鑑定法は現在の我々からすれば全く自明な正当性と科学的客観性をもっている。しかし、ウィルソンに指摘され、はじめて自分の指紋をまじまじと見つめた人々、総立ちになってウィルソンに喝采を送る法廷に居合わせた人々にとってはどうなのか。アナクロニズムに陥らないようにしよう。資格においても、聴衆への効果という点においても、ウィルソンが駆使した指紋鑑定法は魔術のステータスしか持ちえなかったのではないか。ウィルソンは近代性の体現者というよりも、科学と魔術どちらにも転びうる可能性のあった技術の発案者である。

手相学者としてのウィルソンは名を揚げなかった。しかし、指紋収集という「趣味」の特異な使用法を考えついた者として時代はウィルソンを迎えたのだった。ウィルソンが「登録」(records) と呼ぶコレクションは、名前が書かれた指紋プレートの集積にすぎないが、個人情報データベースの走りである。ウィルソンはこのテクノロジーを個人の特定に利用することを考案した。指紋鑑

定法を用いたウィルソンのパフォーマンスは、裁判官、陪審長を含む法廷内にいた全ての人間がおそらく始めて目にしたものであるにもかかわらず、一躍彼を町随一の弁護士へと仕立て上げたのだった。

じっさい、法廷でのウィルソンのふるまいは、弁護士の権限を逸脱する法外なものである。法は白人と黒人が交換可能であるという事態を想定していないゆえに、ロクサーナによる赤ん坊の「取り替え」は犯罪ではない、とキャロリン・ポーターが指摘していることにも留意する必要がある。ポーターの主張の通り、ウィルソンとは法の体現者なのであり、彼こそが犯罪性を創りあげるのだ (Porter 121-36)。しかし、それだけでは済まない。ウィルソンは法の措置とともに、指紋鑑定という司法的な実践を発明し、さらには科学的パラダイムの創出をも同時に行っているように思われるからだ。具体的にいえば、指紋が犯罪立証の証拠となるという法、訴訟の過程で指紋が証拠として吟味されるという実践、そして何よりも指紋によって個人を特定するというパラダイム、これらをウィルソンは満場の拍手を背に一人で打ち立てるのである。

法廷でのウィルソンは、トム・ソーヤ (Tom Sawyer)、ハンク・モーガンなど群集心理を巧みにあやつる扇動者というトウェインおなじみのキャラクターを彷彿とさせる。しかし、ウィルソンのふるまいは扇動者を超え、遙かに大胆である。流通しているイメージを巧妙に利用するゆえに、群集心理の操作が壺を得たイメージの再生産と吹き込みに終始するのに対し、ウィルソンは新たな秩序の創始者である。なぜウィルソンにそんなことが出来たのか。彼の才覚だけでは説明出来ない。ドーソンズランディングでは何か決定的な移行が起こりつつあり、ウィルソンはその機を捉えたのだ。そして、ウィルソンの法廷から出てきた者にとって何かが決定的に変わってしまっている。

ウィルソンは指紋鑑定によって、トムがロクサーナの息子の黒人であり、ゆりかごで取り替えられた「偽の主人」であること、つまりはトムの「真のアイデンティティ」を明らかにした、と主張する。そして、個人のアイデンティティを確証する「指紋」という確実な同定因 (sure identifier) を発見した、とウィルソンは宣言する。

Every human being carries with him from his cradle to his grave certain physical marks which do not change their character, and by which he can always be identified--and that without shade of doubt or question. These marks are his signature, his physiological autograph so

to speak, and this autograph can not be counterfeited, nor can he disguise it or hide it away, nor can it become illegible by the wear and the mutations of time. (Emphasis Mine, 108)

ところが、雄弁なウィルソンには勇み足がある。なぜなら指紋鑑定法は「人種」を判別することはできないからだ。ナイフについていた指紋からウィルソンが殺人犯を特定したことには問題はない。さらに、二人の子供の生後7ヶ月目の指紋と8ヶ月目の指紋が入れ違っていることをもウィルソンは明らかにした。だがそれ自体、様々な解釈を可能にするはずである。ゆりかごの中で主人と奴隷、白人と黒人がすり替えられた、というウィルソンの主張を読者がすんなり受け入れるのは、小説の冒頭にロクサーナによる「取り替え」の場面が置かれているからに他ならない。しよせん、指紋鑑定法が明らかにするのは、ある指紋が特定の個人に属するという事実には過ぎない。

たとえばスーザン・ギルマン (Susan Gillman) はここにウィルソンの野望と挫折——それはとりもなおさず合衆国の白人共同体が、奴隷解放以後、経験したものなのだが——を見る。法学、科学を駆使して、個人の人種的本性が明白になる「確実な同定因」(“sure identifier”)を発見しようとして結局、ウィルソンは挫折したのだとギルマンは主張する。奴隷制廃止と共に、それまで抑圧されていた人種混交 (miscegenation) の現実が露呈されると、合衆国社会は法学と科学を中心とした知を総動員し、人種的、性的、社会的境界線 (racial, sexual or social lines) を打ち立てようとしたのであり、その際に個人が帰属する人種とジェンダーを客観的、科学的に確証してくれる「確実な同定因」(sure identifier)が要請されたのだ、という議論をギルマンは展開する。ウィルソンは、まさにその要求に応えようとしたということになる。だが、法廷での拍手喝采に欺かれてはならない。トムの裁判でただ一つ明らかになったことは、「白人であり自由であること」と「黒人であり奴隷であること」は交換可能だということである。トウエインは「本当の自己」(true self)とその疑いえない明証の基準を示すのではなく、パーソナル・アイデンティティなるものは、どこまで遡ろうと社会的、文化的構築物でしかないことを明らかにしたのだ、とギルマンは結論づける (Gillman 86-104)。

だが、この世にあり得ぬ物体 (= 確実な同定因) を作り出そうとして失敗した錬金術師の悲喜劇をここに見いだすべきなのだろうか。すなわち、法廷にいわせれた人々が「本当の自分」の人種的、性的、社会的な属性を客観的かつ科

学的に保証してくれる存在を探し求めており、ウィルソンはそれに応えようとして挫折した、といえるのだろうか。ギルマンは「本当の自分」への欲望を自明な前提としているが、それもまたアナクロニスティックな錯視ではないだろうか。たとえば、この挫折もまたウィルソンにとっては織り込み済みのものであったとしたらどうだろう。

法廷で満場の喝采をさらうウィルソンは、指紋鑑定法という技術的実践の裏に一つの魔術を仕込んでいたのである。ウィルソンを特異な者にしているのは、指紋鑑定法をいち早く導入したことによるのではなく、それに一つの欲望を繋ぎ合わせたことによるのである。ウィルソンがもたらしたのは、「本当の自分」でも、それを保証してくれる客観的証拠でもない。満場の驚嘆と喝采の中、指紋のプレートから得意の手相学よろしくトムの過去を暴く手際は——すなわちトムの犯行と本当の出自を明らかにするというふるまいは、その起源にまで遡って曇りなく隅々まで明証である自己を獲得しようという幻想を人々に植え付けたのである。すなわち、ウィルソンがもたらしたのは、「本当の自分」への欲望そのもののなだ。決して満たされることのない底なしの真空がウィルソンによって穿たれた。欲望はその対象——すなわち「本当の自分」を確証してくれる物体——に先行するのであり、欲望は完全な充足を絶えず先送りすることによってのみ成り立つ。指紋鑑定法、データベースなどの諸技術を組み合わせ「自分探し」という永久装置を作動させること、それに比べれば「確実な同定因」発見の挫折などは既に織りこみ済みのものであり、本当に起こったことをカモフラージュするだけのものに過ぎない。

忘れてはならないのは、この欲望の創出が新たな秩序と新たな管理体制の出現と軌を一にしているということである。ウィルソンはトムの殺人にたいして因果応報を与えただけではない。ドーソンズランディングの人々は、彼らの個人情報ウィルソンのデータベースによって管理されていること、そして既に彼らがウィルソンによる犯罪捜査プロファイリングの対象となっていることを知るだろう。「誰もがいつでもアイデンティファイされうる」(*he can always be identified*) というウィルソンの宣言は、個人別の情報管理を中枢に据えた新たな管理体制の到来を告知している。転換期を描くことによって、言い換えれば近代の体制の起源に立ち会うことによって、トウェインの小説はデータベース型管理体制が「本当の自分」への欲望によって下支えされていることを明らかにしている。

家柄と伝統によってドーソンズランディングの実力者であったドリスコル判

事の退場と技術と情報を掌握するウィルソンの台頭は、権力システムの移行を如実に語っている。トムの裁判が終わった後、町の人々の間で交わされた次のような会話は象徴的である。

“And this is the man the likes of us have called a pudd’nhead for more than twenty years. He has resigned from that position, friend.”

“Yes, but it isn’t vacant--we are erected.” (114)

ウィルソンのようなものが勝利し、支配の中枢を担う社会がやってきたのである。

結 論

最後に、ドーソンズランディングに起こった歴史的な地殻変動における、ウィルソンの一連のふるまいが占めるべき位置を今一度確認しておきたい。トムによる近親憎悪なき義父殺しは、ドリスコル判事に代表される生の様式の終焉を画すと同時に、家柄、名誉、伝統などによって吊り下げられた社会秩序の解体を呼び込むものであった。だが、それら超越的価値を解体させた否定の力は、籬の外れたまま、トムに見られるように自己にさえ向かう。緊急に追求されるべきは、神や「家」などの超越的根拠なき後の個人の扱いである。だが、超越的根拠に代わって、諸個人にたいしてその存在の意味を保証する根拠を与えることは可能であろうか。トムの存在はその問いに否を突きつけているように思われる。

そこで、ウィルソンは発想を逆転させる。魔術師は秘かなすり替えを忍び込ませた。ウィルソンは諸個人に根拠や意味を与える代わりに「本当の自分」への欲望をそそぎ込み、諸個人をその不可能な実現へと駆り立てたのである。この駆り立てが根拠の欠如を相殺するかのよう。こうしてウィルソンは新たな生の様式を切り開き、新たに定立された秩序へとトムを回収することに成功する。

以後、諸制度、諸技術、諸言説はアイデンティティを中核に据えつつ一つの布置をなしながら諸個人を圍繞し、「本当の自分」への欲望を再生産し続けるだろう。そして、この欲望が諸個人に注ぎ込まれる効果として自己は形づくられてゆく。むろん、自己の起源はもっと遡るに違いない。強調すべきは自己に新たな層が付け加えられた、もしくは自己の再構成がなされたということであ

る。すなわち、諸制度・諸機関に登録され管理されている情報をもとに構成される自己である。それは、他の誰とも異なる客観的な「真の」アイデンティティを「公的」に保証するものであると同時に、優れて「私的」なものとされる「本当の自分」への欲望もまた管理のメカニズムに組み込まれていることを示唆している。トウエインの文学的想像力は、近代的体制の起源に立ち会い、いまここで推移しつつあった個人と社会の形態変化を捉え、それを小説へと定着させたといえよう。

Works Cited

- Chase, Richard. "The Inadequacy of *Pudd'nhead Wilson*." In *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* by Samuel Langhorne Clemens. Edited by Sidney E. Berger, 243-247. A Norton Critical Edition. New York: Norton, 1980.
- Cox, James. "A *Connecticut Yankee* in King Arthur's Court: The Machinery of Self-Preservation." In *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* by Samuel Langhorne Clemens, 390-401. Edited by Allison R. Sensor. A Norton Critical Edition. New York: Norton, 1982.
- , *Mark Twain: The fate of Humor*. Princeton: Princeton University Press, 1966.
- Gillman, Susan. "Sure Identifier." In *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and culture*, edited by Susan Gillman and Forrest G. Robinson, 86-104. Durham: Duke University Press, 1990.
- Porter, Carolyn. "Roxana's plot." In *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and culture*, edited by Susan Gillman and Forrest G. Robinson, 121-136. Durham: Duke University Press, 1990.
- Robinson, Forest G. "The Sense of Disorder in *Pudd'nhead Wilson*." In *Mark Twain's Pudd'nhead Wilson: Race, Conflict, and culture*, edited by Susan Gillman and Forrest G. Robinson, 22-45. Durham: Duke University Press, 1990.
- Smith, David Lionel. "Afterword." In *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson and the Comedy "Those Extraordinary Twins"*. Edited by Shelley Fisher Fishkin. Introduction by Sherley Anne Williams. Afterword by David Lionel Smith. The Oxford Mark Twain. New York: Oxford University Press, 1996.
- Twain, Mark. *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson and the Comedy "Those Extraordinary Twins"*. Edited by Shelley Fisher Fishkin. Introduction by Sherley Anne Williams. Afterword by David Lionel Smith. The Oxford Mark Twain. New York: Oxford University Press, 1996.
- , *A Connecticut Yankee in King Arther's Court*. Edited by Bernard L. Stein. The Mark Twain Library. Berkeley: University of California Press, 1983.

On an Excavated Vacuum: The Formation Process of Modern Identity Observed in Mark Twain's *Puddn'head Wilson*

Hirotaka Kuwano

In his *Puddn'head Wilson* Mark Twain illustrates one historical change that occurred in the American South in the mid-nineteenth century. It can be called a transformation of the locus that makes the existence of society and individuals possible. Twain's imagination thus allegorically depicts a transition of the social formation and that of a way of life in a series of events occurring in Dawson's Landing, a small town in the antebellum South. By resorting to the technique of anachronism, *Puddn'head Wilson* doesn't seem to follow historical facts. Twain, however, is successful in approaching what really happened in the matrix of history.

Describing the process of the historical change, Twain makes three male characters play symbolically important roles: Judge Driscoll, Tom Driscoll and Wilson. The novel deals with an era retaining something of the "good old days." As the world of commodities, however, pervades through the traffic on the Mississippi, the order of the patriarchal community that holds slavery as its infrastructure shows signs of collapse. The vicissitudes of Judge Driscoll represent the declining course of this traditional order of the community. Judge Driscoll leads his life as a patriarch, for the sake of which he would dare to lay down his life. For him, the honor of his family is not only more important than his own life, but also a kind of transcendental ground for the meaning of his life and the world. But instead of the grandeur of death in a duel, Judge Driscoll is killed by his legal heir, Tom Driscoll, meaninglessly and without any Oedipal conflicts between father and son, which might reinforce the patriarchal system. That is, the historical situation no longer allows Judge Driscoll to fulfill his way of life.

Tom Driscoll has negated and broken up recklessly the existing order and unwritten laws, which Judge Driscoll and Tom's mother Roxana observe for the meaning of the world; Roxana lives a caricatured version of Judge Driscoll's way of life. Tom persists in his self-preservation, which results in the negation of other

people. But his power of negation turns back on himself. Tom cannot so much as preserve his own identity, so that, as many critics point out, his being splits, and he faces conflicts between black and white or male and female. This doesn't mean that Tom follows the principle of self-preservation; he lacks a consistent self, as we expect. So Tom's existence represents an unstable transitional situation that comes after the collapse of the ground sustaining the order and meaning of the world until then. Tom's behavior, including the homicide of a relative, causes a kind of social turbulence proper to transitional periods in which people cannot count on any principle, authority or prospect for the future.

In such a situation, as individuals seek the way of life appropriate for the coming era, David Wilson intervenes. First of all, he discovers a unique usage of his hobby: the collection of plates that have both names and fingerprints of the residents. It thus heralds the database technology handling of individual information. At the court for the murder case of Judge Driscoll, Wilson performs an unfamiliar practice to identify individuals according to their identifier, fingerprints, in front of those who have seen their fingerprints full in the face for the first time. But, introducing the new technological practice is not all he does. He subsequently succeeds in reestablishing the social order. His exploits can be achieved to the extent that through the technological practice he has managed to inspire individuals with an unfathomable desire: a desire for "true self." This new desire leads to a new economy of power politics. This means that Wilson originates a modern political system that controls and rules people by possessing exclusively both individual information such as fingerprints and technologies like the database system, which fixes the "true identity" of individuals, publicly and objectively.